教育開発推進機構 NEWSLETTER

教育開発ニュース

VOL. 23 NEWSLETTER

KOKUGAKUIN University　令和３年（2021）３月１日

目　次

● オンラインFD講演会報告 …… p.2
「COVID-19 パンデミック下の高等教育」―インドネシア　ナショナル大学の事例―
インドネシア　ナショナル大学文学部日本語学科教員　日本研究所副所長　ウチュ・ファディラ氏

● シリーズ「國學院大學の教育は、今(3)」 …… p.4
• FD講演会特別企画　オンライン授業インタビュー

文学部	井上	明芳	教授	石本	道明　教授
法学部	高橋	信行	教授	佐藤	俊輔　専任講師
経済学部	櫻井	潤	准教授	辻	和洋　助教
神道文化学部	小林	宣彦	准教授	大道	晴香　助教
人間開発学部	青木康太朗		准教授	長田	恵理　准教授

• ハイブリッド授業体験記 …… p.10
● 学修支援センターオンラインセミナー報告 …… p.12
● オンライン授業体験会・相談会報告 …… p.13
● 令和２年度FD講習会「人工知能の基本的な考え方とPythonでの実行例」開催報告 …… p.13
● 令和元年度「学生が選ぶベスト・ティーチング賞」受賞者からの声 …… p.14
● 教育開発推進機構彙報 …… p.16
● 啐啄同時（そったくどうじ）　―編集後記― …… p.16

KOKUGAKUIN UNIVERSITY 140th 1882－2022

もっと日本を。もっと世界へ。

國學院大學

オンラインFD講演会報告

「COVID-19 パンデミック下の高等教育」
―インドネシア　ナショナル大学の事例―

インドネシア　ナショナル大学文学部日本語学科教員　日本研究所副所長　ウチュ・ファディラ氏

例年、教育開発推進機構では、高等教育における話題のトピックについて専門家をお招きし、FD講演会を開催してまいりました。本年度は、新型コロナ感染症により大きな転換を迫られた一年となりました。そこで、教育開発推進機構では、初めての試みとなりますが、海外からゲストスピーカーをお招きし、オンラインでFD講演会を開催することになりました。ナショナル大学で日本語を教授されているウチュ・ファディラ先生に、ロックダウン中のジャカルタでどのように大学の授業が行われているのか、どのような想いをお持ちなのかをお話しいただきました。ご講演のダイジェストをご紹介いたします。

ウチュ・ファディラ氏

多文化・多言語・多宗教の国　インドネシア共和国

みなさん、こんにちは。ウチュ・ファディラです。インドネシアのジャカルタにありますナショナル大学で日本語を教えています。パンデミックのなかで私達がどのように取り組んだのかをお話します。まずはインドネシアについてご紹介いたします。インドネシアは日本と同様に島国で、約17,500の島で構成され、面積はおよそ日本の５倍です。民族の数は約400、言語は約718語にわたります。人口はおよそ２億６千万人おり、その６割が、首都ジャカルタがあるジャワ島に住んでいます。全人口の87.15％をイスラム教徒が占める世界最大のイスラム教国です。多文化、多言語、多宗教のインドネシアを支える柱に、多様性のなかの統一を意味する「Bhinneka Tunggal Ika（ビネカ トゥンガル イカ）」という独立以来大切にされているモットーがあります。

大都市　ジャカルタにあるナショナル大学

私が勤務するナショナル大学は、インドネシア独立４年後の1949年に創立された国内で二番目に古い私立大学です。現在、９つの学部をもち、学生数は11,923名います。ジャワ島出身学生が87％、イスラム教徒が80％を占めています。

近代インドネシア語を確立し、インドネシア民族文化の礎となったスタン・タクディル・アリシャバナ博士が大学創立者の一人です。アリシャバナ博士が「Look East」という考えを提唱し、東アジアとの交流を重んじた関係から、1982年に日本研究所と日本語学科が設立され、以来、日本の多くの大学と友好大学協定を結んできました。

インドネシアの高等教育の現状

インドネシア全体のなかで、高等教育がどのような位置づけにあるかを説明します。インドネシアの教育体系は教育省が管轄する一般の学校と宗教省の管轄するイスラム系の学校があります。いずれも小学校・中学校・高校・大学の６・３・３・４年制です。2019年度の高等教育統計によると、インドネシア国内には、244の国立大学と4,377の私立大学があり、このうち５割近くの大学がジャワ島にあります。大学に在籍する学生数は8,314,120人。新入生数は2,130,481人です。この６割近くが、政治・経済・商業の中心であるジャカルタがあるジャワ島の大学に通っています。地域格差が大きいのもインドネシアの高等教育の特徴です。

インドネシアにおける大卒者の位置付けも、日本とは異なります。2019年度の大卒の失業者数が2017年度と比べて25％増えたのに対し、高卒と専門学校卒の失業者数は減りました。大卒者のスキルと社会のニーズがマッチしていないこと、大卒者自身が希望する職種が国内にまだ少ないことなどが挙げられます。インドネシアの労働人口１億２千940万人のうち大卒者は10％、小学校卒が41％を占めるといった状況です。

パンデミックに直面して

新型コロナウイルスの感染拡大でジャカルタの知事は「大規模社会制限」を実施し、これに対してナショナル大学は次の施策をとりました。①学生や教職員の安全・安心を第一に考え、キャンパスへの入構禁止、授業や業務は自宅からオンラインで行う。②コミュニティにおける交流活動は一時的に延期。③学生会を通して生活に困窮している学生、授業の継

表紙の写真：雨夜の渋谷キャンパス・神殿前

続が困難になっている学生へのインターネット支援の提供。④授業の継続が困難になっている学生に学費の援助。これら４つを実施しました。

パンデミック前からしていたこと

ナショナル大学では、インダストリ4.0に向けて、パンデミック前からすでに対面授業とオンライン授業を合わせたBlended Learningを行っていました。すべての科目ではありませんでしたが、日本語学科でも一科目だけオンライン授業を行っていました。試験評価も経験していたので、よい練習になって今思えばよかったと思います。

そしてパンデミックになって

パンデミックになってからは、大学のLMS、Zoom、Google Meetをつかって、授業や試験を行っています。パンデミック初期の頃は、学生が授業にアクセスできないなど問題が噴出して、教員もストレスに曝されましたし、学生も不安に襲われていました。ですので、日本語学科では、学生たちのメンタルヘルスを保つことを第一に考え、授業を行うことにしました。私自身、様々なツールを使って授業を行いました。ナショナル大学では、Zoomの契約が限られていましたので、Zoomを使っていたとはいえ、無料で利用できる時間内でしか授業ができませんでした。そこで、安定して学生とつながるためには、LineやWhatsAppのような無料通話アプリを利用する必要がありました。試験のときにも、筆記試験ではなくインタビュー形式でビデオ通話アプリをつかって漢字を読ませたり、漢字の意味を言わせたり、漢字で文を作らせたりなどして学生の成果を評価しました。

不安のなかで入学時期を迎えて

報道によると、パンデミックによる経済状況の悪化のため、大学進学率が多くの大学で50～70％減少しました。インドネシアでは９月が入学期なのですが、今年度ナショナル大学の新入生も去年と比べて30％減少しました。ナショナル大学では、経済的に困難な新入生には学費の分割支払い回数を増やす対策を講じました。また、学生会の年間予算を検討し、各学年会を通じて、学業継続が困難な学生にインターネット利用料金と学費の補助を支援しました。インドネシア教育省も全国510万人の学生に50ギガバイトのインターネット利用割り当てを決めました。ナショナル大学在学生の80％が支援に与り９月新学期開始されました。

日本語学科100人のアンケートからみえたこと

感染拡大が進む中、日本語学科では、学生100人にインタビュー調査を実施しました。マイナス面としては主につぎの５つがみえてきました。①家族としか交流できずに孤独だった②大家族のため自宅での受講が難しい③インターネット接続が安定せず、授業についていけない④勉強意欲がなくなった⑤先を見通せない状況の中で、大きな不安や心配がある。一方のプラス面としては、つぎの５つがみえてきました。①生活スタイルを見直し、適切な食事、睡眠、運動を心がけるようになった②家族のことをより深く理解できるようになった③無料通話アプリで家族や親せき、友人とたくさんコミュニケーションをとるようになった④公衆衛生や衛生観念が身に着いた⑤礼拝を通じて信仰に基づく安心感を得ることができた。

パンデミックに対する不安と向き合う

パンデミック後、学生の不安は頂点に達していると思います。学業を継続できるのか、卒業後、就職できるのかなど、精神的に不安定になる可能性が高いです。この大変難しい問題に、どう向き合えばいいのでしょうか。学生たちのアンケートをみると、今回のパンデミックは神様からの試練だと答えた学生がたくさんいました。「神様に与えられた試練は人間の力を超えない」というコーランの教えがあります。その試練は楽しいこともあるし、つらいこともあります。また、人間の希望ではないですが、将来どうなるだろうかと不安や心配をせず、川の流れのように生活を送っていくといいと学生たちの多くは思っているようです。こうしなければダメという硬い考え方ではストレスが溜まるので、どのような変化に対してもできる限り柔軟に対応するように努力していくことで、今の試練が将来に繋がっていくのではないかと思います。

パンデミックのときこそ助け合う

インドネシア人のアイデンティティのひとつに宗教的な要素があると思います。イギリスのCharities Aid Foundationが行った「World Giving Index 2018」によると、「知らない人を助ける」「寄付する」「ボランティアになる」という３つのポイントが評価基準になっている調査で、インドネシアが世界で一番寛大な国に選ばれています。私自身、このことに懐疑的でしたが、今回のパンデミックのなかで周囲の人たちがお互いに助け合う姿をたくさんみて、あらためてインドネシア人が育んできた助け合いの精神を見直すきっかけになりました。無料で食事ができる食堂や、陽性者に対する寄付など、助け合いがあちこちでみられました。イスラム教の教えと「ゴトンロヨン（助け合い）」といわれるインドネシアに根づく助け合いの価値観が生きていると思います。この文化的な価値観が今回のパンデミックだけではなく、これからもインドネシア人の暮らしの中で維持されていくことを願ってはやみません。

「國學院大學の教育は、今（3）」

FD講演会特別企画　オンライン授業インタビュー

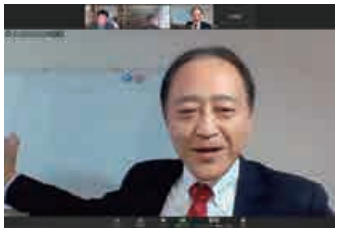
本年度、突如として全面的なオンライン授業への切り替えに踏み込んだ國學院大學。各学部の先生方が、その前期の授業実践を振り返って、苦労したこと・工夫したことについてインタビューに応じてくださいました。学内教職員向けに配信した動画から、その一部分をご紹介します。

（写真は全てスクリーンショットです）

教育開発推進機構長

野呂　健 文学部教授

教育開発推進機構では、前期よりオンラインコーヒーブレイク、オンライン授業体験会等の企画を通して、本学教職員の皆さまへの情報提供、情報共有を心がけてきました。このたび、FD講演会特別企画として各学部より２名をご推薦いただき、先生方の教育実践をインタビュー形式でお届けすることにいたしました。先生方の実践は、何よりも本学の貴重な財産になると思っております。先生方のご苦労の中に垣間見える教育の多様なあり方が、見通しの立たない現在における一つの展望になっていると感じました。例年にない企画ですが、必ずや本学の教育力向上に資するものになっていると考えております。



文学部

井上　明芳 教授

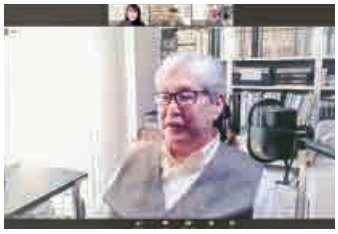
アナログの感覚をデジタルに持ち込む

今回ご紹介する「日本文学講読Ⅰ」は、毎週一作品を取り上げ、分析方法等を学ぶ授業です。毎週400字のレポートを事前に提出してもらい、コメントを付して返却し、それを踏まえて講義を行います。優秀な作品については、クラウドに履修生全員が閲覧可能なボックスを用意しました。見られるのを嫌がる学生もいますので、事前に許可をとります。授業アンケートでは、「優秀フォルダで他の人のものが見られるのがよかった」という好意的な声が結構ありましたので、やってよかったと思っています。

毎年扱う作品は同じですが、書かれるレポートの内容は年々異なり、それに合わせて講義の内容も変わってきます。リアルタイム型で行いましたが、毎週80人前後のレポートにコメントを付しますので、授業の準備期間が限られ、パワーポイント等を作成する時間もありません。そこで、ホワイトボードを用意しました。スタディアプリのイメージで、板書のようにホワイトボードに書きます。スイッチャーを使い、Zoomのショートカットキーで画面を切り替えながら進めました。講義の途中で学生に問いかけると、チャットに反応がありますので、それに対してホワイトボードに注釈を書き込んでいきます。このような方法で授業を行い、三回目くらいで、デジタル技術をどう駆使するかということに加えて、アナログ感覚をどう持ち込むのかが大事なのでは、と気づきました。ホワイトボードについては、見やすさや受講しやすさを学生に確認しながら進めたのですが、アンケートでは否定的な意見はありませんでした。オンライン授業については双方向性ということが盛んに言われていますが、即時性――例えば学生の反応を受けてその場でホワイトボードに書き込むなどしながら、展開していくこと――も大事なのではないかと感じました。

國學院のサイバー空間化

オンライン授業を行っていて、教室の壁は必要ないのではと考えるようになりました。例えば、私の授業で使われる言葉「ストーリー」「プロット」等は、他の授業では違う文脈で使用されると思います。現状では困難ですが、学内のLINEのようなものができたとします。学生が「私が受けている授業では○○という言葉が使われていますが、この理解でよいのでしょうか」と教室外に発信すると、他の授業に出ている学生が「A先生はこういう使い方をしている」などの反応が想定されます。それによって知識がつながり、自分の学問を相対化することができるでしょう。外から授業に参加する、教室のコンクリートの壁がなくなる、というイメージを持っています。ゆくゆくは、國學院の学問がビッグデータ化されたら、と夢想しています。



文学部
石本　道明 教授

同僚たちと情報共有

初めてZoomと言う言葉を聞いてから、まずは、学科で集まって問題を共有するためZoom会議を実施しました。そこで気づいたことがあります。ライブにせよオンデマンドにせよ、特に音が重要であり、マイクとカメラという機材の問題を意識しなければなりません。また、通信が不安定になると、音が途切れたり、画像が止まったりします。有線LANが一般的に安定するので、学生にもなるべくそうするよう勧めるよう教わりました。これまで、コンピュータは使っていても、画像や音声を扱うこととは無縁で、マイクもカメラも十分な用意がありませんでした。そこで、中古品サイトで安く入手し、マイクとカメラの状況は飛躍的に向上しました。また、PCのモニターも大きくしました。ギャラリービューにしても、学生の顔が名刺よりも少し大きな状態で見られるようになり、講義をするという感覚をある程度取り戻せました。

学生も、私も、ずっと画面を見ていると、集中力自体が持続できず、散漫になります。こうした問題点について、同僚に訊いてみたところ、30分から40分をめどに中途で一度休憩を入れるというアドバイスをもらいました。後期からは、全ての授業でそのような方式を取り入れていますが、学生側も集中力が復活します。そういう工夫をすると、むしろ、対面の場合より集中力が持続するのではないかと感じることもあります。

ツールの使い方や授業の仕方について色々工夫はしましたが、ともかくも同僚たちと問題を共有したことがよかったと思います。ちょっと訊いてみたい時に、話ができる場があったことがよかった。今の私の授業も、そういうやりとりで得られた様々な情報をつぎはぎしながらできています。

今後の展望

Zoomで実施した授業は録画されるので、しっかりした講義であれば、それは一つの財産です。大学としては学術資産として位置づけてよいのではないでしょうか。私の授業程度のものでも、アーカイブとして残しておけば、復習は容易にできるし、レポートなどを書く際に非常に参考になるということで、学生からも好評でした。今までになかったタイプの予習教材として提示できる可能性が出てきたと思います。

また、デジタル調査に関する情報を我々のほうで更新していかなければなりません。国文学研究資料館でも、Googleよりもずっと精度が高い画像検索ができるようになりました。それからテキストマイニング。これまでは手作業で数えていましたが、今は関連性自体が数値で出てきて、それらを用いた作品分析ということが進んでいます。そういう情報を提供していけるように、我々自身もリニューアルしなければなりません。

法学部
高橋　信行 教授

予習課題と解説動画

「行政法ＩＢ」、「行政組織法」についてご紹介します。例年100人前後ですが、今回は200人程度が履修しました。毎週の授業では、レジュメを事前に読んで予習課題に取り組んでもらいます。予習課題はK-SMAPYⅡのアンケート機能を使い、授業開始前までに回答してもらいます。課題は10問程度で作るのは大変ですが、一度作ると次年度以降も使えます。また、100字から200字の振り返り課題もあり、授業の感想や疑問点を書いた者に平常点を付与しています。この他に、レポート課題もあります。例年はこれらの課題に加えて期末試験を実施していたのですが、今回は予習課題とレポートにしたところ、単位の取得率が上がりました。学生にとって試験のハードルが高かったことがわかります。なお、予習課題は例年実施しており、遠隔授業に限ったことではありません。

授業には解説動画を用意し、予習課題や振り返り等を踏まえて説明し、双方向性を確保するようにしています。解説動画にはZoomのレコーディング機能を使っています。レジュメを見せながら、重要なポイントを取り上げて説明を加えています。さらに予習課題についてもK-SMAPYⅡの画面を見せながら受講生の解答を紹介し、振り返り課題の解説もします。このように、予習課題と解説動画を組み合わせて授業をしました。

レポート課題の工夫

毎年レポート課題を出していますが、今回は図書館が使えないので、全てオンラインで解決する課題にしました。参考資料はインターネット上にあるものを提示しています。もう一つ重要なことは、法学部にはフェローがいるので、その制度を利用していることです。フェローも本来は対面で指導するのですが、今回はZoomを利用したオンライン面談を実施しました。レポートを提出する前にフェローの指導を必ず受けて、その指摘を受けてレポートを改善してから提出する、という手順になります。これにより、レポートのクオリティがかなり高まったので、フェロー制度の利用はかなり効果的であったと思います。ただし、準備は大変です。フェローの先生方も専門が違うことがありますので、フェロー用の指導マニュアルを私が作成して、そのマニュアルに基づいてフェローの先生方に指導をお願いしました。なお、フェローの利用も例年やってきたことです。

コロナ後について

配信動画は繰り返し見られるので、学生からも好評でした。この方法は効果的なので、今後も学生の学びのクオリティを上げるのに必要ではないかと考えています。

法学部
佐藤　俊輔 専任講師

双方向性確保の難しさ

「国際政治入門」は400人位の受講生がいました。音声付きのパワポを利用していたのですが、開けない学生がいましたので、途中からZoomで録画したものを、オンデマンドとして配信し、スライドと動画を併用した形にしました。オンデマンドにしたのは、通信量の問題もありましたし、400人ではライブは難しいと判断したからです。スライドの場合、長時間見てもらうと集中力という意味でも負担になると考えました。気を付けたのは、各回の狙いを明確にすることです。15分単位で一つの事について話し、例えば3つのスライドがつながると話題が明確になるようにしました。対面では1回の授業で一つの話題が終わらずに次に続くことがありましたが、そうしたことが生じないように、単元を明確にするよう意識しました。

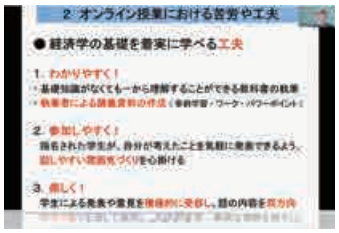
どのように双方向性を確保するかが難しい課題でした。そこで、K-SMAPYⅡのアンケート等を利用し、もらった質問にできるだけ丁寧に答え、回答は別建ての動画で配信することにしました。毎回、K-SMAPYⅡを通じて簡単な確認のテストを行い、何等かのコメントや感想を書いてもらいました。明示的に回答を求める場合は「質問です」と書いてもらい、できるだけ回答することを行いました。

オンライン化にあたって苦心したのは、双方向性の確保で、クラスフォーラムやアンケート等、様々な方法を使いました。また、遠隔授業のよい点として、スライドを何回も見てもらえることが挙げられます。学生の感想にもそのような声が多くあり、嬉しかったですし、心強かったです。

後期の授業では、顔が見えるようにすることを課題としています。スライドが主ですとなかなかお互いの顔が見えないので、後期に入ってからは数回に一度、ライブでこれまでのまとめとか、質疑を受ける等の回を設けています。オンデマンドでも質疑がありますが、それまでに解消できなかったことを解消できるようにし、双方向性を心がけています。演習授業はライブですが、スライドや資料の提示等、Zoomの共有機能で皆がすぐに見られますので、Zoomの機能を活かせるようにしています。

オンラインの可能性

オンライン、遠隔授業には様々な可能性があります。オンデマンドは講義として悪いものではなく、何度も見ることができるため、かえって理解できるという声も届いています。オンラインと対面をどう組み合わせるかが今後の課題なのだと思います。大教室の講義もアクティブラーニングに近づける部分が出てくるのではないかと思います。二項対立ではなく、遠隔の利点を対面にどう組み合わせるか、例えばオンラインで講義を行い、対面で討論を行うことも考えられます。今後に活かしていけることを、今回の経験の中から出していく必要があると思っています。



経済学部
櫻井　　潤 准教授

400人でのアクティブラーニング

担当科目の「日本の経済」は、アクティブラーニングを効果的に行うためのアイデアを盛り込んだ教科書に基づいて進めます。この科目は、学部の必修科目であり、また共通教育科目として専門教養科目群経済学系科目の必修となっています。わたしは共通教育科目を担当しました。そのため、初学者でも経済学の基礎を着実に学べる工夫を常に意識していました。

オンライン授業における苦労と工夫は、それぞれ3点あります。苦労①急ごしらえの準備ゆえの、多くの人々の困難・不安・不満。充実した学習の機会になるのだろうかという不安がありました。②ブレイクアウトルーム機能が使えない。400名超の履修者がいましたので、少人数のグループワークができない状況下で双方向性の授業を行うということです。③教室とは異なるオンライン環境下での双方向授業。教員も学生も慣れていません。工夫は、わかりやすく、参加しやすく、楽しく、の三点です。参加しやすくなるよう、顔も見えない学生が話しやすい雰囲気を作るよう心掛けました。学籍番号を読み上げて発言してもらったのですが、積極的に発言してくれました。楽しく参加できるよう、学生の発言を否定することはせず、積極的に受容してやりとりを展開し、学修を促すようにしました。

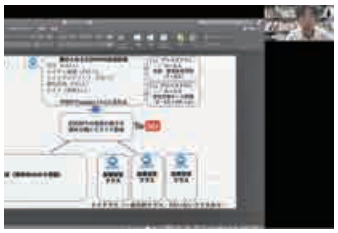
グループワークの方法を紹介します。まず、受講生が予習として事前学習に取り組みます。その後、授業の冒頭で、指名された受講生がマイクオンで事前学習の成果を一言で発表します。それに加えて時間が許す限り他の受講生からもチャットで意見を受けます。また、Zoomの挙手機能を使って回答の分布を共有することもありました。受講生全員で進めるグループワークとしては、指名された学生が自分の回答を発表し、次に指名された学生がそれに対する意見や感想を発表します。教員

はそれを整理、補足したりしながら、受講者間のやりとりを促すようにしました。

オンライン授業を通して学んだこと

まず、あくまでも対面授業における工夫がベースになることです。対面授業から遠隔授業に変わったというより、対面授業で行っていた工夫をどう活かすか、ということです。次に、Zoomの機能は授業運営に大いに役立つということです。挙手機能は、賛成・反対等のシンプルな問いに対する回答結果を全体で即座に共有できます。三つ目は、非対面の難点を見出して工夫することです。グループワークに参加しない学生への対応も考える必要があります。

後期も同じ科目を担当していますが、学生は前期よりも落ち着いて受講していますし、グループワークも授業の回数が進むごとに慣れているようです。今回得られた成果を対面授業につなげ、よりよい教科書づくり、よりよい経済学教育を目指したいと思っています。



経済学部
辻　　和洋 助教

学生の声をすくい、一体感を高める

この４月に着任し、いきなりオンライン授業となったため、まだ１回も教室で授業をしていません。授業は全てリアルタイム双方向型で、アクティブラーニングを実践しています。オンライン授業に臨むにあたって、①対面の授業に近い環境を作る、②対面ではできないことを実践する、の２点を掲げています。①４学期制の他大での例ですが、１学期と２学期を比較すると、２学期の方がレポートの点数が下がるというオンライン授業特有の傾向が見られました。学生からは顔も見えず声も聞こえない環境では発表しにくい等の声がありました。また、ブレイクアウトルームに移動しない学生も複数いました。カメラオフ、ミュートでは授業へのモチベーションが保てないので、３学期は、視覚情報が大事であると学生に伝え、対面の授業に近い環境を作るために、オンライン授業におけるルールを設けました。強制ではありませんが、できるだけカメラはオンでお願いし、やむをえない事情がある学生はオフにしました。こうして対面に近い環境を整えたところ、授業の満足感は高まっています。②利用するITツールは、Zoomとクラウドツールです。例えば、Googleジャムボードは模造紙と付箋の役割を果たし、対面時とほぼ同じグループワークができます。出席はGoogleフォームを使い、番号、名前の他にコメント――相談したいこと、不安な点や悩み等――を記入してもらい、提出してもらいます。オンラインで孤立しないように、いろいろなツールを使い、学生の状況を把握する工夫やしかけを意識しています。このように授業での一体感を高め、学生同士のコミュニケーションが円滑にいくようにしました。学生からも「充実した時間を過ごせた」等のコメントが寄せられて、概ね満足度の高い授業になったと思います。オンラインでも対面に近い、また対面以上のことができると気づきました。

オンラインの集大成

先日、経済学部の基礎演習プレゼン大会が実施されたのですが、これがオンラインの集大成的なものになると思います。基礎演習は１年生の必修科目で、23クラス、全約500人の学生が３～４人一組のグループに分かれ、約２カ月かけてリサーチしてプランを練ります。クラス代表23チームから６チームを選出し、決勝大会を全学生で見ます。これまでは大教室で実施していましたが、今年は完全オンラインで実施し、500人全員が決勝大会を見られる設計をしました。Zoomの配信部屋を用意し、Youtubeの限定公開でライブ配信しました。FAという学生スタッフが運営しますが、かなり綿密なリハーサルをし、検証しながら２か月かけて作り上げました。

オンラインだけでも無事に決勝大会を成功させ、オンラインにあらゆる可能性があるとわかり、我々の自信になりました。

神道文化学部
小林宣彦　准教授

オンラインでもこれまでと変わらない授業を

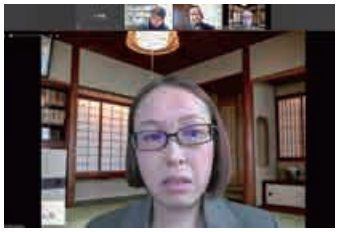
まずは「神道史学」の授業についてお話します。この授業は座学で、パワーポイントと板書を併用し、学期末試験によって評価していました。オンライン化にあたっては、Zoomのホワイトボード機能で板書同様のことができますので、リアルタイム型を選択しました。ペンタブレッドを使えばパワーポイント資料にも書き込みができるので、チャット機能で学生の声を聞きながら、説明を書き加えたりしています。これまではパワーポイント資料に書き込むことはしなかったのですが、対面に戻っても続けていきたいと思っています。また、毎回の課題は学生の負担になると考え、授業内の小テストを実施しました。小テストはK-SMAPYⅡの課題機能を利用しています。このようにして、リアルタイムでも対面と変わらない授業ができたと思います。

毎年200人近い履修生がいるため、対面では学生の声を拾うことは困難でしたが、今年はZoomのチャット機能や、毎回の小テスト等で寄せられる学生の声を拾うことができ、この点では、例年よりも学生に寄り添った授業ができたと思います。ただ、知識の定着を確認する期末試験は必要と考えておりますので、この点がオンラインでは難しいところです。

オンラインの利点を模索する

演習は、指導という面では対面の方が優れています。オンラインの方が優れているのは、発言が活発になることです。対面では発言を求めることが難しいのですが、チャットではこちらが強く求めなくても何かしら考えて質問をしてくれます。しかも、慣れているせいかチャットの記入が早いです。「単位に影響する」と言っていることもありますが、期待以上の質問をしてくれます。学生は、面と向かって発言するのは難しくても、チャットでは意見を言いやすいのかもしれません。

また、神主になるための必須の実技科目も担当しています。祭祀における正式な装束は、着けるのが難しく、習得には時間がかかります。前期は授業がほとんどできませんでしたが、その間に、細かいポイントをおさえた動画を作成しました。作成時は動画に効果があるのか半信半疑でしたが、事前に学生に動画を配信してから授業に参加してもらったところ、劇的な効果がありました。習得がかなり早かったのです。動画で予習をし、授業時には動画を見ながら確認し、授業後にも動画で復習できます。例年は15回の授業でようやく何等かの形になるのですが、今年は半分くらいの時間で、例年もしくは例年以上の技術の上達が見られたと考えています。今後対面に戻っても、動画で予習してから授業に臨んでもらうことが必要だと考えています。そして、学生の習得レベルをさらに向上させたいと思います。



神道文化学部
大道　晴香 助教

学生を不安にさせないように

４月に着任したばかりで、右も左もわからない状況でこの事態に突入しました。「宗教社会学」はオンデマンドの講義形式で、K-SMAPYⅡとZoomの録画配信のみ、最低限のツールでシンプルな形で実施しました。45分程度という目安が設定されていましたが、いかに要点を絞って伝えるか、授業内容のコンテンツの作成に苦心しました。内容を詰め込みすぎず、早すぎる展開にならないように焦点を絞り、パワーポイントのスライド枚数は多すぎないように、音声で手厚く説明するイメージで作りました。また、なるべく一枚のスライドで効率よく理解できるように工夫しました。学生によって45分のとらえ方が違い、授業料分教えてもらえるのかという主張もあれば、容量を圧迫するのでなるべく短くしてほしいという要望もあり、どこに照準を合わせればよいのか悩みました。個人的には、授業の面白さの一つに教員の雑談があると思っているので適宜入れてみたところ、雑談等はなくして短くしてほしいという意見もありました。

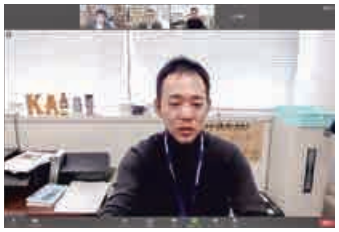
学生も不安だと思いますので、質疑へのリプライはなるべく早くするようにし、授業時間中はK-SMAPYⅡのクラスフォーラムに張り付き、メールにも出来る限りではありますが、すぐ返信するように心がけました。また、スマートフォンで受講する学生やプリンタ未所持の学生もいるということでしたので、配布資料の文字サイズを大きくし、配布資料は動画で使用したものとほぼ同じにし、プリントアウトできなくても動画で内容が把握できるようにしました。

学生からフィードバックをもっと欲しいという意見がありました。初任ということもあり、スライドの準備に時間がかかり、授業の数時間前に録画をアップロードすることもあり、その間に100人以上の学生のコメントを確認して反映させるのがなかなか難しい状況でした。授業評価アンケート見る限り、学生は自分の書いたものがどう評価されるかを気にしていたようでしたが、アンケート機能を使ったので、課題に個別にコメントをつけて返却することができず、学生の要望に上手く応えられなかったのが反省点です。

学生のニーズに目を向ける

後期に入って、課題へのリプライをじっくりするようにし、前回の傾向を示したり、面白いコメントを抜粋して紹介したりしました。コメントを読み上げられた側も意識して次の課題に取り組んでいるのが、目に見えてわかります。リプライに力を入れて、私としても充実感を得ているところです。

授業のオンライン化を経験して、学生に対する感度がよくなったと思います。これまでも意識していましたが、受け取る学生のニーズに目を向ける態度が培われたと思います。



人間開発学部
青木　康太朗 准教授

学生に理由を説明する

「幼児と環境」はライブ配信で行い、デジタルツールは主にK-SMAPYⅡとGoogleフォームを使いました。Googleフォームでは事後課題としてミニテストを行い、不正解が多かった問題については翌週の授業で再度説明をするといった工夫をしていました。その他にも、授業のまとめや振り返りとして自由記述の課題を出し、その回答内容をもとに学生の理解度の把握に努めました。また、授業に対する質問やコメント欄を設け、それに答えるかたちで授業の補足説明などを行い、学生とコミュニケーションを図れるようにしていました。

コメント欄に、「課題の量が多く、次の授業に間に合わない」といった意見が寄せられたことがありました。私の授業では講

義は45～60分とし、残りの時間は課題に取り組むようにしていました。課題は残りの時間で終えられるように配慮していましたが、学生によってはその時間内に終わらないことあり、こうした意見が寄せられたのだと思います。しかし、そもそも大学の授業は前後にも学修が必要になりますが、それを理解している学生は多くありません。そのため、単位を取るためには授業の事前・事後学修が必要で、それを前提に課題を出していると説明したところ、90分で収まらないことについて納得してもらうことができました。

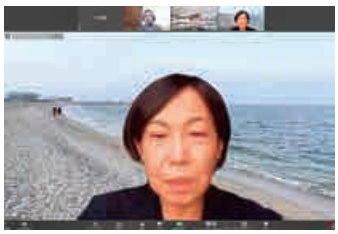
また、Googleフォームを使用する理由についても質問がありました。K-SMAPYⅡのアンケート機能は学生の手元に回答が残りません。Googleフォームは入力したメールアドレスに回答が戻ってくるので、学生も回答した内容を残しておくことができます。事後課題は授業のまとめに関わる内容もあるので、手元に残るようにしておくことでレポートなどを書く時にも役立つと説明したところ、その学生からGoogleフォームのほうがいいとコメントが返ってきました。

何を教えるのか、そのためにベストな方法は何か

前期の授業では、「授業を受けたことで、考え方や感じ方が変わった」「学びが深まった」といった学生の意見もあり、オンライン授業でも、授業展開を工夫したり、デジタルツールをうまく活用することで、対面授業に近い効果が得られるのではないかと感じました。

ただ、双方向性を確保するため前期はライブ配信で行いましたが、チャットによる質問はほとんどなく、毎回、事後課題のコメント欄に書かれた質問に答えることが多かったので、講義的な内容の授業ではライブ配信でやらなくてもいいのではないかと思い、後期の講義科目についてはオンデマンド配信で授業を行っています。オンデマンド配信は学生が授業の時間に縛られることがないため、その時間にボランティア活動に参加するとか、自分の興味のある活動を行うなど、ある程度自由に時間を使うことができるというメリットがあると思っています。実技や演習系の授業については対面で行うのがベストだと思いますが、講義については繰り返し見られることや時間の自由度を考えるとオンラインでもいいのではないかと感じています。

何を教えたいのか、それを教えるためのベストな方法は何かということを考えれば、オンライン授業でも対面授業と変わらない、もしくはそれ以上の教育の質を担保できるのではないかと考えています。



人間開発学部
長田　恵理 准教授

学生の意見をベースにして授業を展開する

「初等科教育法（外国語）」は、リアルタイムで行いました。Zoomで授業するのは初めてということもあり、授業が始まるまでに学内外の先生方とZoomを体験し、準備をしっかりして臨みました。

授業で伝えたいことはたくさんあるけれども、長々と喋るのもよくないと思いましたし、学生たちがZoom上でどのような実践ができるのかも悩ましかったです。会ったことのない学生の考えを知るために、これまでの経験やトピックに関する意見を書かせる課題を毎回出しました。通常でしたらリアクションペーパーで意見を出してもらうのですが、最初はK-SMAPYIIの課題管理を使いました。しかし、３クラス展開で合計160人ほどいて、ファイルの確認が困難なので、三回目あたりからアンケート機能を使いました。回答をダウンロードするとエクセルファイルになるので、意見を集約し、授業の資料に用いました。前回の課題の振り返りからZoomの授業を始めますが、学生の意見でこれはと思うものを拾ってスライドに提示します。この資料は、私からの補足資料とともに授業終了後にPDFにしてアップロードします。学生のコメントの中から、ぜひ共有したいと思うものや、逆にうまく伝わっていないと思われる点など、たくさん拾い上げて説明を加え、それを踏まえて授業を進めます。学生の意見を毎回丁寧に確認し、それをベースにして授業していると伝えることが、学生との関係づくりに役立つと考えました。

後期の工夫、今後について

授業では学生同士の共同作業も必要で、前期はブレイクアウトセッションを使い、そこで出た意見をチャットに記録してもらったのですが、それを皆でシェアするのに時間がかかることが課題でした。後期はPadletやMiroといったweb上のツールを使い、そこに書き込んでもらうことにしました。私もリアルタイムで何を書いているか確認でき、書かれていることに対してコメントを書き込むこともできます。

これまでの講義授業では、次回までに教科書の第何章を読んでくることを予習課題として課していたのですが、実際に学生が読んでいるのかをきちんと確認していませんでした。今回は予習用のワークシートを作り、それを出してもらうことで最低一回は教科書を読んでもらうことになりました。反転授業にもつながりますが、対面になってもこの形で続けたいと思っています。

アンケート機能でのコメントの確認は教員にとっては時間がかかって大変ですが、今まで見えなかったものが見えたと感じました。一方で、学生たちが顔を突き合わせて話し合うことでより様々な意見が出るとも思いますので、対面が早く可能になるといいと思います。

ハイブリッド授業体験記

教育開発推進機構准教授　鈴木　崇義

今般、感染症対策の一環として、令和２年度は國學院大學でもオンライン授業が実施されました。今年度は、後期から（より厳密にはサマーセッションから）一部の実技・実習系授業で、教室での対面授業も実施されるようになりました。そして、教室設備などを整え、11月中旬にはハイブリッド授業も部分的に開始されました。

今回、ハイブリッド授業を担当した一教員として、授業の準備（ここでは教室やオンライン授業環境のセッティングを指します）や授業運営に当たって感じたことなどを、以下に述べたいと思います。

1．ハイブリッド授業の仕組み

教室で学生を前に授業を行う点は、通常と同じです。ただし、その教室には、黒板・教室内を撮影するカメラと集音マイクが設置され、両方とも据え置きのパソコンに接続されています。

パソコンでZOOM（Web会議ツール）を起動し、カメラの前で授業をすると、授業の音声と教室の様子が、遠隔で受講している学生にも中継されるというのが、基本的な仕組みです。

このように、教室で受講するか、遠隔で受講するか、受講形態を学生が選ぶことができるという点が、ハイブリッド授業の特徴といえるでしょう。

2．ハイブリッド授業の実際

実際に始めてみると、まず、開始前にカメラ・マイク等の電源を入れたり、映像を確認したりするなど、機材の事前準備と調整にかなりの時間を取られました。また、パソコンは教室据え置きのため、毎回、ZOOMにIDとパスワードを入力してログインし、授業後に必ずログアウトする等の細かい作業が求められます。

加えて、オンライン授業全般で起こりがちな問題として、パソコン自体が不具合を起こす可能性も想定しなければなりません。そこで私は、下のイメージ図のように、据え置きのパソコンとは別に、自分のノートパソコンを持ち込んでZOOMに接続し、基本的な操作は自分のパソコンで行う方式で授業を行いました。

次に、ハイブリッド授業では、教室の受講生とオンライン上の受講生の双方に配慮し、かつ、学生からのチャットもチェックしなくてはならず、やや慌ただしくなります。

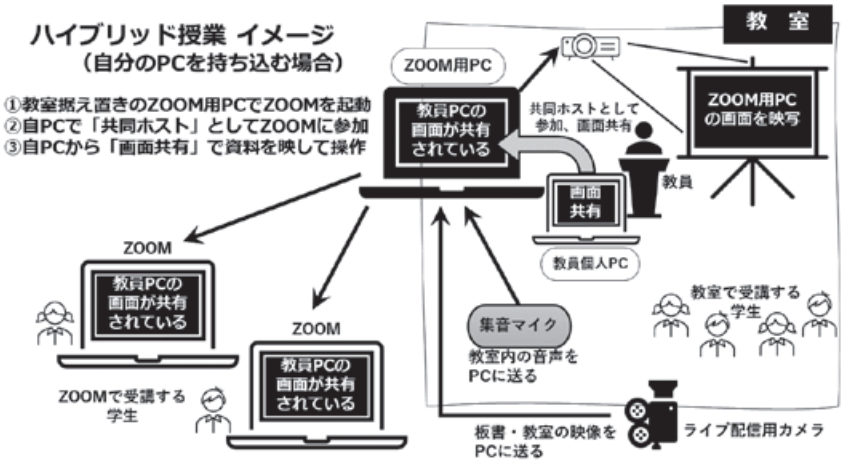
さらに言えば、教室内の学生・オンラインの学生それぞれに、ただ講義を聴いてもらうことはできるとしても、たとえば、教室の学生とオンラインの学生との間で、直接対話や意見交換をしてもらうようなことは困難です。従って、おそらく、ハイブリッド授業で演習のようなディスカッションや、学生同士のグループワークを実施するのは難しいことでしょう。現段階で、これらの学修活動を行うとしたら、教室の学生同士・オンラインの学生同士でグループを作るなど、分割せざるを得ないと思います。

3．ハイブリッド授業の感想

若干の問題や緊張感はありましたが、ともあれ、目の前に学生がいることがたまらなく嬉しかったというのが第一の感想です。オンライン授業を経て、改めて教室でやる授業の良さ、教室という環境のありがたさに気づけた次第です。

その一方で、これが通常の対面型講義であれば、受講生が密集した教室で授業が行われることになります。たとえば、窮屈な机で、後ろの方の席に座った学生などは、よく見えない遠くの黒板を眺めながら受講することに、不自由を感じることもあるでしょう。そういう場合は、むしろオンライン授業のほうが集中して受講できるということもあるかも知れません。

オンライン・対面それぞれの良い部分を、全て盛り込むことは難しいでしょう。しかし同時に、ハイブリッド授業は、新たな授業スタイルを開いてくれる可能性を秘めているようにも見えます。授業前後の準備・片付けが非常に煩雑である等、まだまだ課題があることは否定できませんが、この点も試行錯誤とフィードバックを重ねながら、よりよい授業スタイルとは何かを、模索してゆきたいと考えています。



ハイブリッド授業を対面で受講していた文学部の一年生３名からお話を聞くことができました（令和２年12月中旬）。以下はその内容を再構成してまとめたものです。

ハイブリッド授業を対面で受けた印象はどうですか。

- オンラインで受けるよりは、対面で受けた方が集中できて、理解度が深まるように感じます。
- 一人自宅で受講するときとは全然違う感じです。今後、ハイブリッドで受講する人と、オンラインで受講する人との間に差が出てしまうのではないかという気もします。
- 後期から対面で受けていますが、大学に行くために外出するのは、正直に言えばやはり不安です。行きたいけれども、行きたくないと言うか、複雑な気持ちです。

前期にオンライン授業を受けた感想を教えてください。

- 國學院大學は人の多い渋谷にあるので、オンラインへの移行は仕方ないと思いました。ただ、他大学に通う友達はどんどん授業が始まっているのに、うちはなかなか始まらない気がして、当初不安があったことは確かです。５月初めに授業が始まったときはホッとしました。
- 授業の録画を毎回配信してくださったおかげで、繰り返し見ることができて理解度は上がったと思います。オンデマンド授業のプラス面だと思います。動画だと、先生のお話のペースも速いし、直接質問することも難しいので、何回も見られるのはありがたかったです。
- 他の学生と一緒に受講していると、自分がこの授業にどのくらいついて行けているのかが、ある程度分かりますが、オンラインにはそういう感覚がないので、時々とても心細くなりました。１年生の時に学ぶことは４年間の土台になるのに、その土台をしっかり身につけられているかどうかがわからなくて、この先大丈夫かと思って。
- ZOOMでグループワークをしたときに、初めて他の学生と話して、連絡先を交換して、友達になることができました。最初は誰かに何かを聞きたいと思っても相談できる相手がいなくて孤独だったので、嬉しかった。
- 毎回レポートを課す授業があり、とても大変でしたが、調べる力や文章力は身についたと思います。対面だとここまで頻繁に課されることはなかったかも知れないと思うので。パソコンの操作も結構覚えました。
- 生活が機械的というか、単調で退屈になりました。決まった時間に起きて、パソコンを開いて、授業を受けて、課題をやって、寝て。それがまた次の日も、という感じです。

課題も多く出たと思いますが、大変でしたか。

- とにかく量が多く、最初は泣きそうになりました。どの授業も出席代わりに課題が出るのですが、幾つも履修しているので、大学のことだけで一日が終わります。睡眠時間も削られてつらかったです。理解度確認の小テストならわかるのですが、数千字のレポートを毎回課すという授業もあって、つい、学生の状況というか、気持ちをわかってくれているのかなと思ったこともあります。
- 調べものが必要なことが多かったのですが、最初は図書館が休館で大変でした。インターネットの情報は禁止という先生もいらっしゃったので、なおさらです。でも、電子図書館やオンラインデータベースを開いてくれて、それが本当にありがたかった。調べものにたくさん使いました。ジャパンナレッジ最強です（笑）
- レポートにS・A・B・Cの評価がついて返ってくるのですが、少しでも添削があると嬉しいです。評価だけパッと出ても、どこが悪かったのかが全然わからないので、自分のためにあまりなっていない気がして。まして、返却もコメントもない授業だと、ちゃんと書けていたか、いつも不安になります。先生方が、とても忙しいということはわかるのですけれども……。だから、これは別の授業ですが、K-SMAPYⅡで出した課題に先生がすぐに返信をつけてくださったときは、すごく嬉しかった。

人間関係のあり方に、何か変化がありましたか。

- 旧来の友人と電話することが多かったので、より繋がりが強くなった気がします。それから、去年は受験であまり家にいなかったこともあり、家族と話す機会が増えました。家族も在宅勤務で、平日も一緒でしたから。
- 大学での友達が、全然できないのがネックです。他大学に行った高校時代の友達とも会いにくいです。普通にごはんを食べに行くにしても気軽には外に出られないですから。気持ちの面で若干ストレスがあります。
- 友達もそうですが、縦のつながりが欲しくて。先輩方に色々なことを聞きたいのだけれども、そういうのがないのが結構つらくて困っています。サークルに入ろうかと思っても、何となく今更感があって踏み出せません。来年の新学期からだと、一年生と一緒ということになって、それも気まずい気がします。

今後のことで不安とか、気になることはありますか。

- 私は、今、対面授業は一科目しか受けていませんが、今後突然増えたり、急に多くの授業が対面に切り替わったりしたときに、これまで通り授業について行けるか不安です。また、対面とオンラインを交互に受けるというような状況が生じたときに、受講の予定が立てづらくなりそうなのも心配です。
- 来年は対面授業が増えるというように聞いています。対面を再開してくださるのは嬉しいです。でも、コロナの感染者がまた増えている状況で、本当に始めて大丈夫かな、という不安や、感染してしまうかもしれないという怖さも感じます。

学修支援センターオンラインセミナー

いろいろな学び インクルーシブな学び

令和２年12月23日、学修支援センターのオンラインセミナー「いろいろな学び　インクルーシブな学び」を開催しました。学部学生、大学院学生、科目履修生、留学生、教職員といった様々な立場からの参加があり、テーマにふさわしく多様な場となりました。教育開発推進機構の鈴木崇義准教授が中心となり、インクルーシブな学びの環境を整えることの重要性と、これまで学修支援センターが行ってきた本学の障がい学生支援や今後の課題を取り上げました。ダイジェストをご紹介します。

インクルーシブな環境の重要性

テーマの「インクルーシブ」は「包摂的」を意味する言葉です。「誰も排除しない」と言い換えることができ、すべての学生が平等に学ぶためにも、また、高等教育機関がすべての人に開かれた場となるためにも重要な考え方です。学びたい人が等しく学ぶことができるように、環境を整えなければなりません。ここでいう環境整備とは、物理的な環境だけではなく、学びの手段や方法、文化的・社会的な考え方、学内の様々な手続きなど広範にわたります。文化的なバリアや言語のバリア、差別を含むようなバリアやバイアスを知り、実際に解消するアクションにつなげ、いろいろな学びの環境を整える場に大学がなればと思っています。

障がい学生支援に関する基本方針やガイドラインの紹介

いろいろな学びを実現するための環境整備のひとつとして、國學院大學では、障がい学生支援に関する基本方針とガイドラインを定めています。国連の障害者権利条約、障害者差別解消法、東京都による障害者への理解促進及び差別解消の推進に関する条例などに沿って策定されていますが、障がいをもちながら國學院大學で学ぶ学生ひとりひとりの経験と実践の積み重ねが基盤になっています。

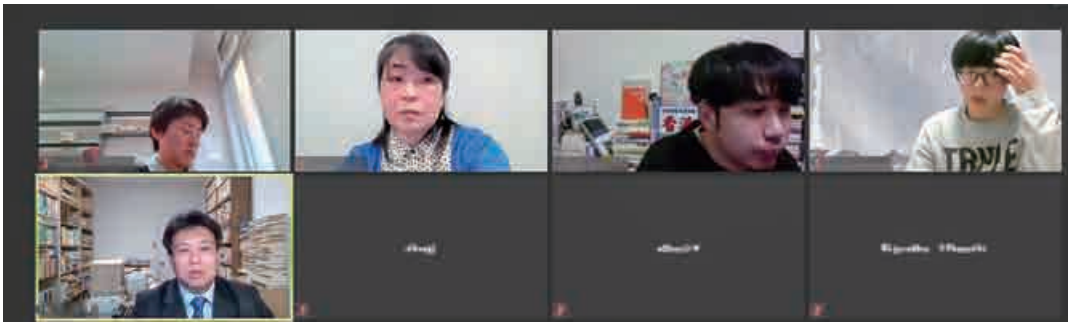
いっしょに作り上げることの大切さ

國學院大學では、10年前から聴覚障害の学生の情報保障のためにノートテイクやパソコンテイクを実践してきました。こうした取り組みは、テイクを受ける学生、テイクをする学生の双方がいなければできません。その一人、大学院博士後期課程に在籍する伊東さんがテイクを受けた経験を話してくれました。「國學院のテイクが手探りの状態から、大学院で学ぶ現在まで10年にわたりテイクを受けながら学びをつづけています。音声情報を言語情報に変換してくれるテイカーがいなければ先生の話の大半は理解できません。テイクによって自分の知らなかった世界を知り、世界が広がる経験ができたことに感謝しています。学びが専門的な領域に深まるにつれて、専門的な内容に特化した情報保障の技術をもつテイカーの必要性を感じています。それから、テイクの支援を受けるべきかどうか悩んだり、またテイクを受けたいと思っても言い出せない学生が学内にいると思います」。

昨年度までテイカーとして情報保障をしていた小池さんにも、テイクの経験から得たことを話してもらいました。「テイクをしていた時は、とにかく情報を伝えることだけで必死でした。今回のセミナーもそうですけれど、障がいやインクルージョンがセミナーのトピックになるような特別なことではなくなって、どんな人でも学び合えるそういう風にならないかと感じています」。

課題の共有にむけて

学修支援センターでは、今後もオンラインセミナーをつづけていくつもりです。学生、教職員いっしょに課題を共有し、インクルーシブな学びの環境を構築していきたいと思います。参加してくれた皆さん、ありがとうございました。



オンライン授業体験会・相談会 開催報告

オンライン授業相談会：令和２年９月４日（金）・［追加実施］令和２年９月15日（火）
オンライン授業体験会：［１日目］令和２年９月８日（火）・［２日目］令和２年９月10日（木）

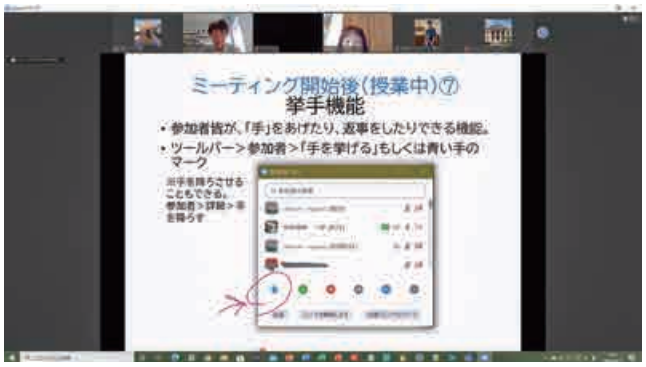
感染症拡大防止のため、今年度は急遽、全面的なオンライン授業への切替となりました。急激な変化による教員の負担は大きいものであり、また、人と人との接触を避けるという対策を取る以上、教員同士の情報共有の機会も、なかなか得づらい状況がありました。

そこで、教員の負担を少しでも和らげ、寛いだ雰囲気の中でオンライン授業についての意見交換や相談ができる場の構築を目的として、教育開発推進機構主催で「オンライン授業体験会・相談会」を開催いたしました。

相談会は、前期に２回開催した「オンライン授業コーヒーブレイク」を足掛かりに、教員個人の困りごとについて、個別に相談を受けることとしました。こちらは特に兼任講師の参加者が多く、当初は１日のみとしていましたが、急遽15日に追加して開催しました。相談者一人ひとりの疑問や困りごとの相談に応じる中で、オンラインという不慣れな環境下において、教員も孤独な状況に置かれていることがうかがえました。

体験会では、７月に実施した、学生への遠隔授業に関するアンケートを参考に、Zoomミーティングの設定や録画配信の方法、オンライン授業ならではの注意事項など、複数のテーマに基づき、オンラインセミナー形式で説明を行いました。それぞれの回で、参加者からたくさんの質疑が寄せられ、オンライン授業における細かな疑問点やその対応について、情報共有することができたと思います。

今後も、教員が気軽に集って、授業の工夫やヒント、あるいは困ったことなどを共有できる場を提供していきたいと考えています。



令和2年度FD講習会
「人工知能の基本的な考え方とPythonでの実行例」開催報告

【講師】坂本 正徳 氏（國學院大學 人間開発学部教授）
【日時】令和２年10月30日（金）15:00〜15:30　※ZOOMによるオンライン開催

教育開発推進機構では、令和２年度のFD関連研修の一つとして、「データサイエンス」をテーマとしたFD講習をオンラインで開催しました。

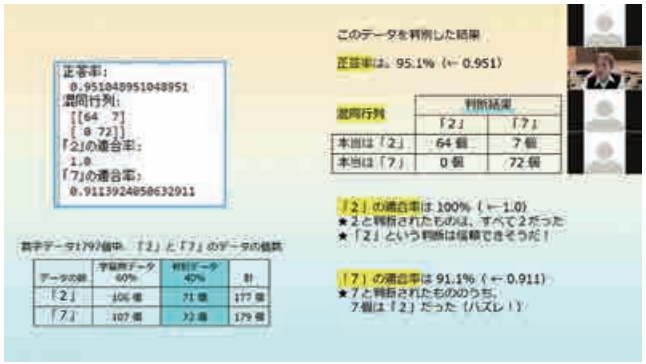
昨今、社会・経済上の諸問題の解決に向けて、統計学、数学、コンピュータサイエンス、人工知能等に関する識見を有し、数理的思考やデータ分析のスキルを駆使することができる人材の育成が求められています。また、それらと社会との繋がりなどを考えることのできる能力を育むことも、文理の垣根を越えた重要なテーマです。

このような観点から、教職員の間でも、人工知能に対する基本的な考え方等を理解・共有することを目的として、本学人間開発学部の坂本正徳教授を講師としてお招きし、お話いただきました。

講習では、顔認証や自動運転などの分野で話題の人工知能が、近年ディープ・ラーニングの登場により、人間を上回る精度を獲得しつつある状況が語られました。

その上で、そもそも、人工知能が物事を学習し・判断するというのは、実際には何を行っているのかということについて、機械学習の一種である「教師あり学習」のプロセスを中心に説明がなされました。

また、具体例として、プログラミング言語Pythonによる初歩的な画像認識の実行例も紹介され、今後もこのような人工知能の研究・開発はより精度を高めつつ進展し、導入が進んでいくであろうことが示唆されました。



令和元年度「学生が選ぶベスト・ティーチング賞」受賞者からの声

平成26年度から兼任講師の先生を対象として始まり、平成28年度からは専任教員の先生もあわせて行っている、例年の前期・後期実施の「学生による授業評価アンケート」の結果で上位に選ばれた先生方を対象として表彰を行う「学生が選ぶベスト・ティーチング賞」。

その、令和元年度受賞者が決まりました。

令和元年度の「学生が選ぶベスト・ティーチング賞」は、「総合満足度」（あなたはこの授業を履修して良かったと思いますか）の設問に焦点を当て、受講者の高い評価を得た先生方９名が受賞の運びとなりました（専任教員の先生は文学部２名・他学部各１名、兼任講師の先生は全体から３名）。

例年は受賞者の先生方に大学へお集まり頂き、学長より正賞・副賞と感謝の言葉を贈り、受賞者の先生方からお話しをいただく表彰式を開催していますが、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、式の挙行は取りやめ、賞の送付による贈呈のみを行いました。

そうした中、受賞された先生方からご感想をお寄せ頂きましたので、ここにご紹介したいと思います。

飯倉　義之　先生（文学部准教授）
〔伝承文学概説Ⅰ・Ⅱ，現代文化論　ほか〕

今回の受賞は大変に光栄です。受講生の皆さんに授業の内容を理解してもらった上で、興味・関心を持ってもらえたということだと思うからです。教員として、自分が懸命に伝えようとしたことを学生が受け止めてくれたということ以上の喜びはありません。日本文学科の伝承文学は、高校までは学んでこない馴染みのない領域です。そのため概説・講読の講義では、伝承文学の意義と面白さを伝えられるように心を砕いています。その試みを受講生のみなさんに評価してもらえたのでしたら、今後の励みにもなります。

野村　ひかり　先生（文学部准教授）
〔書道，日本文化を知る（書道入門）ほか〕

この度は、平成27年度に続き「学生が選ぶベスト・ティーチング賞」をいただきまして、大変嬉しく思っております。評価をしてくださった学生の皆さん、本当にありがとうございます。

日本文化を大切にする國學院大學では、文学部においては「書道」、「書道実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」、「日本書道史」など、共通教育（日本文化を知る）では「書道入門」の科目を開講しています。

学生の皆さんは、これらの科目の受講を通して興味が広がり、文字が美しくなり、すばらしい成長を遂げています。私もこの受賞を機に、より一層身をひきしめ、授業に臨みたいと思います。

藤嶋　亮　先生（法学部教授）
〔比較政治A・B，政治変動論　ほか〕

この度のコロナ禍を受けて、授業について試行錯誤を重ねているさなかに、本当に嬉しい賞をいただき、大いに励みになります。

授業では毎回、重要なテーマについて、できるだけシンプルな疑問文で提示し、それを多面的に検討していくことを心がけました。また、私が担当している政治学分野の授業では、文字通り一つの答えがない問題（open question）を取り上げることが多く、学んだ知識を踏まえ、皆さんはどう考えますかという基本姿勢で臨んでいます。

授業の際のやり取りの中で、新しい着想を得たことが多々ありますが、そのような「良い質問」や「ユニークな着眼点」との出会いを楽しみにしています。

宮下　雄治　先生（経済学部教授）
〔マーケティングの基礎，経営学特論（ビジネスデザインⅠ）　ほか〕

この度は、このような身に余る素晴らしい賞をいただきまして、誠にありがとうございました。大変光栄であると同時に身の引き締まる思いです。

私が担当する経営学科目では、受講生が企業経営やマーケティングを学ぶ楽しさを感じながら本質を理解できるよう、産業界や社会と繋がりのある授業を心掛けてきました。

今回の受賞を励みとして、学生の皆さんが自らの思考

を深め、将来への展望や希望を見いだすことができる授業を目指して、精進して参ります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

笹生　衛　先生（神道文化学部教授）
〔神道史学演習Ⅰ・Ⅱ，宗教考古学Ⅰ・Ⅱ〕

この度の受賞、大変に嬉しく思っております。ただ、講義・授業で特別な工夫を凝らしているわけではありません。ともかく、私自身が楽しく講義・授業をさせてもらっている。これが、参加している学生に伝わるのかもしれません。

特に自身の研究で、新たな成果が出たときには、いち早く学生に披露しており、それにより、学問・研究の意義や楽しさを共感してもらえば望外の喜びです。

今回の受賞は、そのような私の考えと、参加学生の考えが一致していたことを示しているように思います。これを励みに、今後も講義・授業を楽しく行なっていきたいと考えています。

杉田　洋　先生（人間開発学部教授）
〔教職論，特別活動の理論と方法(小)　ほか〕

どの授業も、どうしたら「人づくりをする人として、あるべき姿を真剣に追求してくれるだろうか」、「その必要性を強く認識し、具体的に学びに向かってくれるだろうか」と考え、試行錯誤をくり返してきました。今般、その取組について、学生から高評価を得られ、努力が報われたと嬉しく思っています。

この賞を得て、一層、自身の教師経験を生かし、全国の学校を訪問して得た実際の映像やエピソードなどを多用し、現場教師の生の声を直接伝えるなど、リアリティにこだわっていこうとの意を強くしています。学生の心に届く授業を目指して…。

今村　梅子　先生（兼任講師）
〔教職論，教職実践演習，国語科教育法Ⅰ〕

この度はありがとうございました。受賞年度は、入学して間もない１年生が９割以上を占める「教職論」(前期)と教育実習を終えた４年生の「教職実践演習」(後期）が特に印象深い授業でした。教職課程の入口と出口で投げかけた問いに対する学生のみなさんの反応は、非常に勉強になりました。アナログ人間は教務課に相談することが多くなってしまうのですが、いつも気持ちよく仕事ができるようお力添えをいただき、感謝しております。

コロナの時代の学生を支援できるよう、今後も授業内容を工夫していきたいと思います。

長浜　尚史　先生（兼任講師）
〔スポーツ実技A，スポーツ・身体文化ⅠA・IB〕

この度は「学生が選ぶ ベスト・ティーチング賞」を頂き、大変光栄に存じます。対象となった科目「スポーツ実技」は、定期的な運動が自身の身体にどのような変化をもたらすのか実体験するとともに、受講生同士がコミュニケーションをとりながら、技術や戦術を身に付けていく達成感の強いものです。そして、私はデモンストレータでありファシリテータでした。

今年度はこれまでとは全く異なる形態で授業を進めていますが、前期の最終レポートに書かれてあった、「自分の健康を気遣えるようになった」とか、「セルフコントロールの力がついた」といった文言には大いに励まされ、つくづく教師は学生に育てられるものだと実感しています。

森本　行雄　先生（兼任講師）
〔國學院の学び（聴覚障害者の文化と手話学），國學院の学び（基礎から学ぶ手話入門）〕

まずお礼を言いたいのは、毎回多くの気づきをくれる学生さんたちです。お陰で、16年もの間、変化に富んだ内容で教えることができています。

同時に、耳や目に障害のある友人たちが大学まで足を運んでくれて、スピーチしてくれているからこその受賞だと思っています。

コロナ禍で、マスクが必須となり聴覚障害者がコミュニケーションしづらくなっています。手を取っての案内ができなくて、視覚障害者が街に出られなくなっています。そんなことも直に伝えてもらいたいのですが、今はそれもかないません。それができる日が必ず来ると信じています。

更に工夫をして精進せよとの、励ましの賞だと肝に銘じています。ありがとうございました。

教育開発推進機構彙報（令和２年７月１日～12月31日）

※肩書き等は当時のもの

行事

○学生オリエンテーション・講習会・試験実施等

6月22日～7月1日：教員採用試験一次対策指導会
7月8日：教育実習IBガイダンス
7月16日～7月31日：教員免許状一括申請登録会（一次）
7月19日～8月12日：教員採用試験二次対策指導会
7月29日：３・４年生介護等体験２年目ガイダンス
7月30日～8月5日：TOEIC®オンラインテスト
8月5日：介護等体験９月直前ガイダンス（栃木県のみ）
9月3日：介護等体験９月、10月直前ガイダンス
8月24日～9月14日：教員採用試験対策夏期集中講習会
9月28日～11月18日：教員就職支援　教職総合ゼミナール
9月29日：介護等体験11月～２月直前ガイダンス
10月1日～11月19日：後期教育小論文講習会
10月3日～12月12日：教員就職支援　専門教科ゼミナール
10月28日：介護等体験２年目未体験者向けガイダンス（代替措置の説明）
10月31日～11月7日：第１回教員採用模試（自宅受験）
11月7日：秋季特別教員就職ガイダンス
11月11日～12月16日：首都圏教育委員会教員採用井試験学内説明会（６自治体）
11月14日：教員求人登録説明会
11月16日～11月22日：TOEIC®オンラインテスト
11月16日～11月25日：教員免許状一括申請登録会（二次）
11月25日：教員採用試験合格者報告・相談会
11月25日：介護等体験１年目プレガイダンス（教職履修カルテ説明含む）
11月28日：TOEIC®学内テスト
12月4日：教員就職支援　志望県別学習相談会
12月5日：TOEIC®学内テスト
12月9日：介護等体験１年目①ガイダンス
12月12日：TOEFL ITP学内テスト
12月17日：教育実習東京都公立学校希望者・大学一任者対象実習校発表
12月19日：TOEIC®学内テスト
12月24・25・26日：教職教養冬期集中講習会

FD活動、教育支援・学修支援関連催事

7月8日：第２回オンラインコーヒーブレイク開催
7月27日：第２回新任教員研修（動画配信）「國學院大學校史」実施（講師：髙野裕基 研究開発推進機構助教）
9月4・15日：オンライン授業相談会
9月8・10日：オンライン授業体験会
10月30日：FD講習会「人工知能の基本的な考え方とPythonでの実行例」開催（講師：坂本正徳 人間開発学部教授）
11月18日：ハイブリッド授業準備動画配信（担当教員向け）
12月15日：第３回新任教員研修・FDワークショップ（動画配信）「シラバスと成績評価」実施（講師：小濱 歩 教育開発推進機構准教授）
12月23日：オンラインFD講演会（動画配信）
講演「COVID-19パンデミック下の高等教育―インドネシア ナショナル大学の事例―」（講師：ナショナル大学日本研究所副所長 ウチュ・ファディラ氏）
特別企画「オンライン授業インタビュー」（報告者　文学部：井上明芳教授、石本道明教授。法学部：高橋信行教授、佐藤俊輔専任講師。経済学部：櫻井潤准教授、辻和洋助教。神道文化学部：小林宣彦准教授、大道晴香助教。人間開発学部：青木康太郎准教授、長田恵理准教授）
12月23日：学修支援センターオンラインセミナー「いろいろな学び　インクルーシブな学び」開催

出張等

7月18日：（オンライン）関西地区FD連絡協議会 講演会・シンポジウム参加（小濱）
8月25日：（オンライン）私立大学情報教育協会「2020年度 ICT利用による教育改善研究発表会」参加（小濱）
10月26日：（オンライン）関東圏FD連絡会参加（野呂・新井・小濱・仙北谷・原田）
10月26日：（オンライン）帝京大学ブラッシュアップ・プログラム「データによる授業改善のすすめ：大学における教育の質保証とIR」参加（小濱）
11月13日：（オンデマンド）日本学生支援機構令和２年度「障害学生支援専門別セミナー」視聴（佐川、鈴木、佐藤）
11月27日：（オンライン）IRI Lab.セミナー参加（小濱）
11月27日：（オンライン）千葉大学アカデミック・リンク・セミナー「オンライン大学における教育・学修支援」参加（佐川）
11月30日：（オンデマンド）日本学生支援機構令和２年度「障がい学生支援テーマ別セミナー【発達障害学生の修学支援】」（佐川・佐藤・高橋・大橋・砂田・星野）
12月5日：新潟コメ作りワークショップ奉納（出雲大社）出席（東海林）

講師・研究発表・情報提供

12月10日：青山学院大学障がい学生支援センターとの意見交換会

刊行物

9月：『教育開発ニュース』Vol.22

啐啄同時（そったくどうじ）― 編集後記 ―

令和２年度はオンライン授業中心の一年でした。この、オンラインという環境をなんとか活かせないかという思いと、後期もまだまだ続くオンライン授業のサポートが少しでもできないかという思いから、秋から冬にかけて複数のオンラインイベントを開催しました。とりわけ、教育開発推進機構初となる、海外から講演者をお招きしてのFD講演会は、オンラインの強みを活かした企画だと考えています。

他にも、オンライン授業実践の工夫を共有したいとの思いから、学部の専任教員へのオンラインインタビューを行いました。ご協力いただいた先生方には厚く御礼申し上げます。また、後期途中からハイブリッド授業も実施されたため、教室にて受講していた１年生にも様子を聞くことができました。

今後も、自分にできることは何かを考え、行動してゆきたいと思います。（鈴木）

教育開発推進機構NEWSLETTER『教育開発ニュース！』第23号　令和３年３月１日発行
発行人 野呂　健　　編集人 佐川　繭子　　鈴木　崇義
発行所 國學院大學教育開発推進機構　〒150-8440　東京都渋谷区東4-10-28